



2024年 年頭司牧書簡



札幌教区の皆さんに年頭のご挨拶を送ります。

コロナによる行動制限がなくなり、休止していた教会の各種活動が再開し、教会活動は通常に戻ろうとしています。コロナ前に行っていた司教の公式訪問はコロナ禍にあつてできずになりましたが、その間も公式ではない形で、各地の教会を訪ね主日のミサの手伝いを続けて来ました。今も、出張や研修等の業務がない日曜日ではできるだけ小教区でミサをするように努めています。昨年は36の主日に各地の教会を訪問することができました。例年に比べ多くの教会を訪問できたと思っておりますが、それでも巡回教会を含めて58ある教区内の教会を主日に訪問するには数年がかりになってしまいます。少な

くとも年に1回は小教区を訪問してほしいという声が聞こえてきますが、このように努力していることをご理解いただきたいと思います。

コロナ禍の影響

各地の教会を回って感じたことは、コロナ禍における行動制限は想像以上に教会共同体にダメージを与えたということです。以前から、教会で青年を見かけることは稀でしたが、加えて子どもを見かける教会が少なくなり、当然その親世代の姿もありません。私が訪問した時に子どもが侍者をしていた教会は極めて稀でした。それに加え、コロナ禍により教会から離れた人たちが戻らず、中止されていた様々な教会活動も再開できずにいるか、以前のような活力を失っているところが多く見受けられます。今、求められている視点は、どのようにして過去の教会の姿に戻すかではなく、今を出発点として、どのような教会の未来図を描くかということです。その為の議論が、地区や教区の宣教司牧評議会を中心に進められています。今年は、何らかの方向性が提言されるでしょう。

教会の多国籍化

一方、どこの教会を訪問しても目立っていたのが外国籍信者、特にベトナム人青年

の増加です。彼らが朗読等の典礼奉仕を行っている教会が多数あり、特に地方の教会でそれが顕著でした。以前の年頭書簡で触れていた「日本の教会は、日本人のみの教会ではない」ということが確実に現実化しています。ここに、進むべき教会の未来図の一端を見ることができると気がします。

継続するシノドスの歩み

シノドスの歩みについて、昨年各教会を回って多く聞かれたのが「まだシノドスやっているのですか」という声です。更にシノドス自体について理解していない人が多数いることから、ミサ後に説明の時間を設ける教会も多くありました。シノドスは2021年に開会が宣言され、昨年10月に第1会期を終え、今年の第2会期に向けて動き出しています。今回のシノドスの特徴は「会議」を目的とするのではなく、会議に向けてのプロセス、シノドス性（ともに歩む）が目的です。（今回のシノドスについての詳しい解説は一昨年の年頭書簡をご覧ください。）そして、それは会期を終えて終了するのではなく、今後の教会の歩みとして継続されていくことが期待されています。それは、とりもなおさず、各小教区自体が、互いに耳を傾け合い、すべての人が参加できる教会共同体の在り方を目指し続けることです。

このシノドスの歩みを続けるにあたり一つの課題が見えてきました。昨年、第1会期を終えるにあたり、全世界の信徒に向けて「神の民への手紙」が、バチカンから発表されました。その中に次のような一文があります。

「識別を進めるためには、教会は絶対的に最も貧しい人から始めて、すべての人の意見に耳を傾ける必要があります。そのため教会は回心の道を歩むことが必要であり、それは賛美の道でもありません。(中略) それは社会で発言する権利を否定された人や、教会からさえも排除されていると感じている人の声に耳を傾けることであり、あらゆる形の人種差別の犠牲となつている人、とりわけいくつかの地域の文化を蔑視されている先住民族の声に耳を傾けることなのです。現在の教会は何よりも回心の精神を持って、教会メンバーによる虐待の被害者となつた人々の声に耳を傾け、このようなことが二度と起こらないようにするために具体的に組織として取り組む義務があります。」

この文章のメッセージを私たちの教会の身近な問題の視点でとらえると深刻な問題が浮き彫りになります。「教会からも排除されていると感じている人」。「教会メンバーによる虐待の被害者となつた人々」。これは、ご存じの通り世界的に見た教会の問題を指しているものですが、決して遠くの国で起こっていることではなく、私たちの教会内でも起こっている身近な問題なのです。教区内でシノドスの歩みが続いていくために、会議のやり方を変えたり、「分かち合い」を実施したりしていくこと

等いろいろなのが提案されていますが、その前提を崩しかねない現実があることが最近分かりました。それは教会内の「ハラスメント」です。

札幌教区内のハラスメントの状況

昨年、札幌司教区ハラスメント対応デスクが教区内でアンケートを実施し、584の回答が寄せられました。その中の「教会内でいじめ、いやがらせ、ハラスメントがあると思いますか」という設問に対して、41%の人があると答えたのです。そして、

その内容は「司祭・修道者から」が24%だったのに対し、「信徒同士」が87%にも上りました。このアンケート調査を任意回答にした小教区もあったため、問題意識を持つている人がより多く回答したということも考えられますが、その割合の多さに驚かされます。そして、その記述内容から思っていたよりも深刻な実情が浮き彫りになつてきました。個人的な関係で人格を否定されるような言動を取られて傷ついた体験も多数ありました。が、より深刻な問題と感じたのは、組織内で権威をもつた信徒あるいは肩書はともかく教会内で支配力を持った信徒によるパワーハラスメントです。そして、ハラスメントを行う人に共通していることが、その自覚がないことです。司祭が教会運営にかかわるのが難しくなつてきている現状を鑑みると、それに代わつて指導的な役割を任される信徒にこのような問題があることは教会にとって致命的です。

すがさらに大切です。いじめやハラスメントを見て見ぬふりをするのではなく、現実を直視し顕在化させることが必要です。しかし、それを憎しみや復讐のような否定的な感情に基づいてなしてはなりません。私たちの共同体の中心にキリストがおられることを強く意識し、その愛に導かれるよう努めなければなりません。否定的な思いが如何に強くともそれに支配されてはなりません。そのような時こそ、祈りと識別が必要となります。ハラスメントについては、これまで司祭のための研修をたびたびおこなつてきましたが、今後は教会でリーダー的な役割を持つ信徒のための研修会を準備したい考えです。尚、ハラスメントのアンケート結果は近くまとめられ公表される予定です。

教会運営に「分かち合い」と「識別」を

でもこれから教会の在り方を識別していくために「分かち合い」が大切であることが指摘されてきました。「分かち合い」という表現は本来何らかの結論をだす「議論」には使われませんが、その精神を生かすという意味で使っていることをご了承ください。教会員すべての人の意見が尊重されるためには、強い立場の人、声の大きい人、押しの強い人の意見ばかりが通つてしまふ教会の会議の在り方を見直す必要があります。まさに、この点がハラスメントの温床になつていると考えられます。気が弱く発言できずにいる人の意見も同等に重いものであり、それを無視したり、精神的な圧力で封じ込めたりすることなく相手をリスパクトして耳を傾ける姿勢は「分かち合い」の鉄則であり、シノドスの精神の根幹です。そして、私たちのこの集まりの中に主イエスがおられることを意識し続け、聖霊の導きを常に感じ取ることが「分かち合い」です。どれほど「正論」と思われる意見が、声高に提案されていても、静かに聖霊の働きを意識する人たちがその意見に違和感を持つとき「正論」＝「正解」ではないこともあるのです。識

別とは本来「話し合い」と「み言葉」を聞くこと、そして「沈黙の祈り」の繰り返しの中で、選び取られていくものです。私たち一般信徒が実践する場合は、それほど厳密に時間をかけてする必要はありませんが、話し合いの結論を出す前に、み言葉に耳を傾け祈りの時間を設け、理屈ではなく、出そうとしている結論に皆が一致して希望、勇気、慰め等の肯定的な思いを持てるならば、それを聖霊の導きと判断するという方法をとることをお勧めします。

信徒中心の 教会の向かうべきところ

今後信徒の教会における役割は、ますます大きくなってきます。教皇様が繰り返し教会の克服すべき悪弊と指摘しておられる「聖職者中心主義」ですが、これは、いまだ解決されない教会の現状でもあります。しかし、それは司祭の側だけの問題ではありません。なんでも司祭に頼り、全ての判断を司祭にゆだねてしまおうとする信徒の側にも

問題があります。司祭のパワハラは言語道断ですが、なんでも仕切ってしまう司祭の多くは、善意をもって信徒に尽くそうと誠心誠意頑張っているのです。結果、全てを取り仕切らざるを得ない司祭になっているのです。

しかし、この現状は司祭や信徒のメンタリティーの変化を待たずに、現実が先行する形で解消されつつあります。司祭の高齢化と減少はさらに深刻になり、教会の運営は信徒に委ねられる形に変わっていかざるを得ない状況です。そして先のハラスメントアンケートでも報告されていたのですが、高齢や権限を持たない協力司祭に対する信徒による逆ハラスメントが起きているという報告もあがってきています。信徒が権限を持つと司祭以上に権威主義的になるという指摘は以前から世界各地から報告されています。

教会の未来像を描くとき、信徒中心の教会にイエスの現存を感じられ、福音に生かされた宣教する共同体が実現するかどうか、その可能性と方向を決定づけるのは「今」の私たちです。



2016年、教皇フランシスコは、子どもに対する教会のメンバーの責任について明確に意識できるよう、神により頼む日として「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けるよう全世界の司教団に通達されました。これを受けて日本の教会は、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を四旬節第2金曜日と決めました。この日は、四旬節の金曜日という回心にふさわしい日であり、同時に象徴的な日でもあります。それぞれの教区司教の呼びかけに従って、四旬節の間、あるいは前後の日曜日などを使って、祈りと償い、

被害者の痛みを学ぶ機会を作るよう呼びかけられています。札幌教区では例年各小教区で取り組むこととし、北一条教会では「祈りと償いの日」に司教司式によるミサが行われています。

しかし残念ながら、2023年7月1日～11月30日に実施された「ハラスメントのない教会共同体をめざして」教会におけるハラスメント意識調査（本調査結果報告は次号教区ニュース掲載予定）では、全回答者584人のうち、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」について、「知っている」と回答した人は179名31%、「聞いたことはあるが内容は知らない」「知らない」と回答した人は合わせて398人68%、また、「そのミサや祈りの集いに参加した」ということは、「ある」と回答した人は68人12%、「ない」「教会ではやっていない」と回答した人は合わせて500人86%という結果でした。

一方で、「教会内で、いじめ、いやがらせ、ハラスメントがあると思いますか」の問いに「ないと思う」205人35%に対し、「あると思う」は237人41%です。（ハラスメント対応デスク）

昨年、日本では芸能界の大きな性加害のニュースが報道され、社会が大きく変わろうとしています。世界のどこかの国の出来事でも他人事の世界でもなく、私たちの身の回りにも有りうることです。調査結果はこのことをまぎれもなく表しています。今も苦しみ痛みを抱える人が共同体の中にいるのです。私たちはこのことを強く心に刻み、それぞれが祈り、償いを求める日になるよう、各小教区での取り組みをお願いします。

※「ハラスメントのない教会共同体をめざして」教会におけるハラスメント意識調査は11月30日必着分で終了しました。集計作業の関係上、期日を過ぎても到着した分は集計には含めませんが、貴重なご意見として受理し、期日内受理調査票と併せて適切に対応させていただきます。（ハラスメント対応デスク）

全国担当者会議報告

カリタスジャパン

担当 松村繁彦神父

2023年10月10日から11日にかけて日本カトリック中央協議会においてカリタスジャパン（責任司教 成井大介）全国教区担当者会議が開かれた。参加者は責任司教をはじめ、各教区から1名ずつの担当者、事務局員の24名で行われた。

今年の主な議題は次のとおり。
① TOGETHER WEEK キャンペーンについて
② カリタスジャパン中期計画
③ 四旬節キャンペーンについて
④ 教区担当者会オフレージョナルプラン意見交換

今回の会議では、担当者に初参加者もいたことから、改めてカリタスジャパンとは何か！として現在行われていることの総合的な位置づけ、具体的な活動などが説明された。

カリタスジャパンは国際支援機関の様に捉われがちだが、本

来は支援やケア（弱くされた人、差別を受けている人等への）を必要とする人に寄り添うために、具体的実践を通して愛を示していく活動をする団体である。しかし主体は各教区の活動であることなので、各教区がよりその実践を進められるよう協議体としてカリタスジャパンがあるとということが確認された。各教区で行えない案件を支え、他の教区や他の国との連携を図るために、カリタスジャパンがサポートをしている。そのため、各教区の動きが大切であることが改めて強調された。冒頭では那覇教区、横浜教区、札幌教区の「TOGETHER WEEK キャンペーン」の中心的な指針である「ともにケアする共同体」に向けた活動がどのように行われているかが発表された。その後、各教区を助けるためのいくつかの資料や冊子の説明があり、また対象となる人と歩むためには祈りも必要とのことから、各教区（小教区も含む）で祈りの集いを開いてはどうかなどの意見も出された。

国際カリタスやカリタスアジアとの連携について報告があり、今後支援活動を行っていくカリタスジャパンとしてどのようなようにすればよりスムーズに、より効率的に支援連携が取れるのか。また自分たちの弱みは何なのかなどの検討がマーケティング的に行われ、今後発展するための必要なことを検討した結果が報告された。

最後に今度の四旬節キャンペーンの大綱が説明され、担当者会議においてその実施の承認がなされ、過去の献金の推移や支援先、今後のスケジュールなども確認された。

今回の会議は例年のようなテクニカルな部分ではなく、より本質に基づいた話し合いがなされ、参加者一同はそれぞれ教区に戻り、展開できるための知恵をいただいた。

全国典礼担当者会議

函館地区典礼担当 祐川郁生神父

全国典礼担当者会議が、2023年9月4日から6日に中軽井沢・御聖体の宣教クララ修道会で開催された。札幌教区は6地区から成っており、各地区に

典礼担当者がいる。今回は委員長の上杉神父から函館地区の担当者が参加したらどうかという提案があり、祐川神父が初めて参加することとなった。軽井沢は有名な避暑地で、観光なども期待していたが、非常にまじめな会議ではほほ缶詰状態で熱心に発表や意見交換がなされた。この時期、森一弘司教のご逝去と重なり、担当の梅村司教は初日のみの参加、委員長の白浜司教は東京往復されての参加、東京教区の担当者は参加できない状態であった。

今回のメインテーマは昨年の待降節第一主日から実施された新しい「ミサ式次第」について各教区からの実践状況や諸問題を分かち合い、今後に生かしていくこと、また、新しい「ミサ式次第」に伴い、他の諸儀式書の言葉の変更などを確認することであった。

どの教区も最初は戸惑いもあったが、割とスムーズに新しい式次第に移行できたようであった。ただ、選択肢が多いので、どれを選ぶかなどの難しさもあり、ほとんどの教区が最初に書かれているものを使っている。また、ミサ中の司祭や会衆の所作につ

いても活発な意見交換がなされたが、司祭の所作については手の挙げ方など、細かいところはそれぞれの個性によるものが大きいと感じた。

また、各儀式書のレイアウトなどについても指摘され、今後新しくミサ典書を発行するにあたり、ページのめくりやすさなど、かなり細かいところまで意見を収集していた。

新しいミサ式次第にともない、一人ひとりの式次第を手にするのとよりも、教会によっては大きなスクリーンに映し出し、選択肢のある場合もそこに書き記すことで明確になるなど、様々なアイデアを分かち合ったのは、収穫であったと思う。なるほど、式次第やミサ曲、聖歌など、スクリーンに映せば有益であると思う。

神学生養成担当者会議

担当 佐藤謙一神父

2023年10月26日（木）から27日（金）の2日間、東京カトリック神学院主催で2023年度教区・修道会・宣教会養成担当者会議が開催されました。

現在、日本には教区司祭を養

成する機関として、「東京カトリック神学院」と「福岡カトリック神学院」の2つの学校があります。東京カトリック神学院は東京教区管区、大阪教区管区にある10のカトリック司教区の司祭を養成する機関となっていて、福岡カトリック神学院は長崎教区管区の5つのカトリック司教区の司祭を養成する機関です。

しかし、2024年度から東京カトリック神学院と福岡カトリック神学院が一つとなることが司教団によって決定されました。名称は再び「日本カトリック神学院」となります。2009年4月から2019年3月まで設立されていた日本カトリック神学院では2つのキャンパス制をとり、東京と福岡でそれぞれ3年ずつ学ぶ形でしたが、今回の再設立では東京の校舎のみで7〜8年学んでいく形となります。

神学生は入学してから最短で、予科を1年ないし2年間、哲学科を2年間、神学科を4年間かけて卒業となります。2023年度には予科のための建物が新たに完成し、今年から予科生のみで学びと生活をともにしているとのこと。この予科というのは共同生活や人間性の成熟

のための固有のプログラムが実施され、神学院生活の土台を作る期間となっています。

札幌教区では神学科4年で助祭の千葉充さんと哲学科2年のレ・シユアン・ビンさんが神学院で司祭を目指して学びながら祈りの生活を送っています。千葉助祭は卒業後司祭に叙階されることを目指しており、またピン神学生は助祭・司祭候補者として認定されることを目指しています。お二人のためにもお祈りください。

2024年1月25日(木)、教区ホームページがリニューアルします。スマートフォンやタブレットにも対応しておりますので、いつでも必要な情報を見ることができます。さらに充実した教区ホームページをお楽しみに。



教区災害トレーニング

11月18日(土)、ERST (Emergency Response Support Team) 緊急時対応支援チーム)を札幌教区事務局に招いて、災害トレーニングが開催されました。参加者は、ERSTメンバー6名と、司教館事務局職員や、カトリックセンターに事務局のある北海道カトリック学園の職員、またカリタス札幌や、近隣の地区長を務める神父が参加し、札幌教区事務局としての災害対応について学んだ。まず、ERSTという司教協議会の内部に設置されたチームが紹介され、続いて、実際に教区内に災害が起こった際、どんな対応が教区事務局や、教会組織に求められるのか、どんなことが起こるのか、そこにERSTがどのような支援を提供できるのかを、東日本大震災の経験から学ぶトレーニング・プログラムであった。災害発生時には、様々な対応が必要となる。それは被災状況の情報収集。全国や、場合によっては世界から押し寄せる支援や災害状況への問い合わせへの対応。その他、ボラン



ティア・ベースの設置及び運営など、多岐にわたる業務が発生することを学んだ。そのうえで、実際に北海道で想定される災害をピックアップし、それに向けて、事務局や関係組織はどのような対応が取れるかを考えるプログラムとなった。災害はいつどこで、どのような規模で起こるのか想定することは難しい。しかし、日ごろの準備をすることで、緊急時にも迅速に行動を起こすことができるようになる。教会が有事の際にどのような役割が問われているのかを考えさせられるトレーニングになったと思う。

(教区災害対応担当司祭/ERST/佐久間力神父)

【教区司祭人事】

◇2024年1月1日付

■苦小牧地区(札幌地区の千歳・恵庭を含む)共同宣教司牧チームを解く

●札幌地区

○恵庭・千歳

主任 葦島吉哉(チームモテラートル及び担当の任を解く)

協力 千徳康雄(伊達協力の任を解く)

●苦小牧地区

○室蘭・伊達

主任 葦島吉哉(チームモテラートル及び担当の任を解く)

○苦小牧・静内・東室蘭・登別

主任 ライヤ・フランス(東室蘭・室蘭・登別共同主任及び担当の任を解く)

○苦小牧・静内・東室蘭・登別

協力 小林 薫(苦小牧・静内協力の任を解く)

【2024年主な教区行事予定】

▼3月20日(水)11時・千葉充助祭司祭叙階式(予定) ▼4月22日(月)

16時・近藤神父 谷内神父命日祭

▼6月4日(火)〜6日(木)全道司祭大会 ▼6月8日(土)11時半・

教区宣教司牧評議会 ▼8月8日

(木)〜15日(木)教区事務局夏季休業 ▼11月2日(土)11時半・教区

宣教司牧評議会 ▼12月28日(土)〜2025年1月5日(日)教区事務局年末年始休業

▽2025年3月21日(金)性虐待被害者のための祈りと償いの日

【特集】地域と共に歩む教会

「教会内のマンパワー」が減少していく中、地域と共に歩む教会は、新規もしくは継続した活動を行っている。「開かれた教会」と共に、「社会と共に歩む教会」の姿を通して、福音宣教の糸口を絶やさないようにしている。今回の特集は、そのヒントとなればと思いい紹介することとなった。

介護予防を通して 旭川五条教会・旭川六条教会

旭川市中央地域包括支援センターの方が、管轄圏域にある旭川六条教会を訪ねてきたのは一昨年の春。来年度、高齢者に対する介護予防事業を行う会場を探しているとのことでした。運営委員会で協議した結果、地域に開かれた教会として受諾しようとなりました。同時に同じ圏域にある旭川五条教会を、五条運営委員会にも確認した上で包括センターに紹介しました。その結果、六条教会では脳トレ等に取り組み「認知症予防教室」を、五条教会では体操を行う「介護予防教室」を行うこととなり、昨年の春から両教会において旭川市の事業として実施さ



旭川六条教会「サークル」

れ、10月以降は行政の手を離れ、参加者による自主サークルとなり、六条教会では「すずらんサークル」、五条教会では「五条すまいる*貯筋をふやそう*」として、週一回、地域の高齢者や教会の信徒が参加して実施されています。感染症拡大防止のため閉じこもりがちとなった地域

の高齢者に、外出の機会と他者との交流の場を提供し、その刺激により主たる目的である「介護予防」（介護が必要な状態になることを防ぐ）を実現するために地域の教会が利用され身近に感じていただき、福音宣教にも繋がればと祈っています。
（旭川六条教会・荒木 寛）

町民参加型バザー

〜ミカエル祭〜 羽幌教会

さる9月24日（日）第50回ミカエル祭が行われました。教会内だけのバザーではなく、町民参加型で町民のほとんどが知っている町の行事の1つになっています。コロナ禍も規模を縮小しながらも継続してきましたが、今年にはコロナ前と同じように町

の体育館を借り、大きな会場で数百名の来場者がありました。



られて以来、変わることはない目的「自分以外の困っている方のため」に、収益の全てを国内外の諸団体の活動や災害支援に送っていることが町民に理解されているからだと思えます。50年間で総額2千400万円以上を送ることができました。

時代が変わり、人も変わりますが、いつも多くの町民がミカエル祭を通じて、教会や神様とのつながりが続いていることは本当に嬉しいことです。これからも地域に愛されるミカエル祭であり、地域の皆さんと共に歩む元氣な教会でありたいと思えます。（羽幌教会・小寺光一）

地域の子供達と共に ボーイスカウト、北一条教会

11月5日、教会中庭にはバザーでも使う白いテントが建てられました。カトリック札幌教区青少年の家からは、いつものボーイスカウトのメンバーよりもたくさんの子どもと大人が牛乳パック片手に出てきました。ワクワク気分いっぱいに見えます。何が始まるのでしょうか？

私たち、カトリックボーイス

毎年、教会、幼稚園、ボーイ・ガールスカウトが中心となり活動していますが、信者は少なくても、集まる子ども達とその親や町民の皆さんが、一か月前から準備をして、当日も多くの手伝いや片付け等も協力頂いています。当日のミサは聖堂に入りきれない程の人と一緒に祈ることができました。町や町民に教会やミカエル祭が理解され、助けられていると実感します。

これは50年前にマンフレッド神父（現滝川教会主任）が始め

カウト札幌26団（発団46年を迎えました）は、ボーイスカウト日本連盟と共同主催、文部科学省後援の下『ワクワク自然体験遊び』として「ソーセージでキャンプ飯」という体験会を行いました。



した。対象は、5歳～10歳の子どもたちです。近隣の小学校・幼稚園・教会等に1500枚のチラシを配り、親御さん合わせて、40人弱の応募がありました。まず、建物内で櫻谷団委員長

長さを均一にするのに苦労したりしながらなんとか詰めることが出来ました。それを自家製の燻煙機でサクラとヒッコリーのチップで三十分燻煙しました。

次は前日に作っておいたウインナーソーセージをパンにはさんでアルミ箔に包み、牛乳パックの中へ。ソーセージとパンが詰まった牛乳パックを持って中庭へ。牛乳パックに火を点けま

まず、建物内で櫻谷団委員長の指導の下、フランクフルト作り。ひき肉と香辛料を混ぜ一生懸命こねます。それを腸詰め

くるような働きが出来るよう祈りながら、これからもボーイスカウト活動を続けていきたいと思えます。

（北一条教会・吉田房子）

食と音楽を通して 食堂・コンサート・山鼻教会

新しく建て替えられたカトリック山鼻教会は、信徒が集う「祈りの場」であると共に、「地域の人々に開かれた交流と助け合いの場」にしたいという願いを込めて建てられました。

「地域食堂テレジア」は6月24日にオープンしました。新教会建て替えに際し掲げた「地域に開かれた教会」実現に向け、「地域と積極的に関わり合う場」が必要として生まれた、育成部

開催は月1回日曜ミサ後、子ども食堂より利用者の層を広げたいとの思いから、「地域食堂」と名付けました。小さなお子さん連れには福祉部が対応、無理なく少しずつ地域に広めていくことになりました。

まずは安全な食事の提供を第一に、衛生面や食物アレルギーの学習会を開くことから始めました。教会の前を通りかかった方、チラシを見て来る方、信徒



の知人、予約して来る親子など利用者は少しずつ増えていきます。札幌市や子ども食堂の団体に登録し、市民や企業、カトリック学園からの寄付のご支援もいただいています。今後は未信徒にもお手伝いを積極的に募り、より開かれた教会を目指します。

（山鼻教会・加藤知恵）

2023年9月16日、カトリック山鼻教会にパイプオルガン演

奏家の桑山彩子さんを招き、パイプオルガンコンサートを開催しました。パイプオルガンは、毎週のミサの典礼に奉仕すると共に、音楽を通じて地域と教会のつながりを創り、交流を深める目的で導入されています。当日は信徒や山鼻教会縁の方、地域の方々など150名近い方が教会を訪れました。演奏をされた桑山さんはコンサート開催の趣旨を理解してくださり、来られた方が楽しめるよう馴染みのある曲を多く選んでくださいました。また、演奏後はコーヒーをお出しして演奏の余韻を味わっていただきました。



初の試みでしたが、初めて教会を訪れた方も、久しぶりに教会に来られた方も、オルガンの美しい音色と教会とのつながりを感じていただけたのではと思っています。

（山鼻教会・酒井麻里）

カトリック生徒全道大会 ～4年ぶりの札幌で～

カトリック生徒全道大会を2023年10月19日(木)～20日(金)に北海道青少年会館 Compassにおいて実施することができたのは4年ぶりのことです。

はじめに、互いの信頼関係を築くために、参加者がペアを組み、一人は目隠しをして、もう一人が介添えをしながら歩くというゲームを行いました。次に、イエズスの林尚志神父の講話が行われま



した。生徒たちの心には「動けば風が吹く。向き合えば命流れる。」という言葉が印象深く残りました。その後、グループディスカッションと各グループの発表を行いました。この活動のテーマであり、シノドステーマでもある、「共に歩

む」ことを体験してもらおう構成にして、傍観者や観察者としてではなく、一人の仲間として歩むことの大切さを体験してもらうことを目指しました。夕食後はタイ・ボランティアに参加した生徒による報告を聴きました。

2日目は、祈りの集いの中で、一人ひとりの宣誓や共同祈願が行われ、聖歌が歌われました。短い期間でしたが、このプログラムを通じて多くの参加者の心に新しい視点と体験の種がまかれたことと思います。

(函館フ・サル 韓 徳)

正平協全道交流会 ～出かける正平協～

札幌教区正義と平和協議会は、今年度のテーマに「出かけて行く・交流しよう」を掲げ、例年札幌で行われる全道交流会を北見地区で開催しました。北見地区ではここ数年にわたってキリスト教各宗派共同による『常紋トンネル殉難者追悼式』が続けられており、毎年この報告会により会の中で共有されてきました。「その追悼式に参加しよう」から、「その現場を訪ねよう」「北見地区の方々と話したい」と、計画は膨らみ、早々に事務局と北見のメンバーが動き出しました。

また、これら殉難者の事実を追い、実際に遺骨発掘にも携わっておられた石田國夫さん(元正平協代表、元「札幌・郷土を掘る会」代表)を講師に平和講演会(前号掲載)を行い、事前に学ぶ機会を用意でき、13名が参加するツアーとなりました。

訪ねた北見教会では、これまで連絡を取りながらもお会いできなかった方々との楽しい時間をいただき、ミサでは私どものことをお祈りいただき幸せにも与りました。準備はたいへんでしたが、広い道内で各地区がそれぞれ向き合っていることを知り合う旅に『出かける正平協』が得たものは大きかったと思います。私も、冷たい雨の中で慰霊塔の青年像に向き合った時の、重たくも清く確かな感覚を忘れることはないでしょう。

*JP通信119号(11/28発行)に参加した4名が寄稿しています



2023年2月、出張帰りの南千歳駅でJR車内にアナウンスが流れた。「雪のため、この列車はしばらく札幌に向かうことができない。必要な人は向かい側にある列車で新千歳空港へ向かい、バスを利用した方がいい。」という内容だった。大急ぎでスーツケースを持って、階段を上り下り、列車に飛び乗った。そして、翌日から膝が痛くなり、病院に通い続けたが未だ良くはなっていない。

2024年、私は年女であると共に還暦を迎える！ネットで見ると、二つが重なる今年、厄払いをした方がいらしい？きつこの膝はその前触れだったのかもしれない。これからは、もう少しゆっくり仕事をしなさいと神様が言っているのだと思つた。

今年、年男を迎える男性が一人いる。2019年春に技能実習生としてベトナムから日本へ来て、手稲教会に通っていたT Uさんである。彼は19歳の誕生日を迎えて間もなく、「脳動静脈奇形」という先天的な病気が原因で倒れ、緊急手術を受けた。一命は取り留め

たが、脳内出血時に脳幹の一部を強く圧迫したため、体温調節機能を失い、人工呼吸器の装着が必要になった。今も意識は戻っていないが、彼は多くの方々からの協力により障害年金等を受給しながら、在留資格を得て、札幌の病院にいます。コロナ禍を経て、自由に会えない日々が続いているが、病院の許可を得て、ベトナムの両親がスマホの画面から彼に声をかけている。

限られた短い時間、両親は彼の名前を呼び続けているが、このままでもいいのだろうかと思つている。彼の両親は、私よりもずっと

年女・年男

と若い方がいらしい？きつこの内には彼に会わせてあげたいと考えて始めているのは、多分、私が膝の痛みを感じたからだろう。ベトナムの小さな町から札幌へ来るのは、長距離移動であり、経済的にも肉体的にも大変だと思うが、願わくは、新千歳空港とベトナムの直行便が開設することを祈りながら、彼の両親が彼と直接面会することを模索したいと思つている。

(札幌教区難民移住移動者委員会・西 千津)



苦小牧・静内・東室蘭・登別主任
ライヤ・フランシス神父

もうそれほど若くはない ある「青年」のお話し



※ライヤ師は2023年12月迄
東室蘭・室蘭・登別共同主任

幼い頃から、司祭になりたいと思っ
ていました。「なぜ？」と聞かれ
たとき、「ある日のミサの最中に
司祭を見て、ただ単にそうなりた
いと思った」というのが彼の唯一
の答えでした。理由は他にありま
せんでした。

高校に入学した時、青年は自宅
からそう遠くない神学校で月例会
があると聞かされました。同じ小
教区に、司祭になるための勉強を
したいというもう一人の青年がい
ました。二人はすでに友人で同じ
ような考え方を持っていたため、
とても楽しい月例会でした。集会

はメリノール会に連絡を取り、ポ
ストン地域で働いていた神父と面
談しました。青年は、地元の神学
校での面接とは大きく異なり、と
ても温かい気持ちで受け入れてく
れている事に気づきました。ポス
トンの神学校での面接から帰った
後、彼は母親にこの2つの経験
について話しました。母親は彼に
、「あなたの心に従いなさい」と言
いました。そして青年はポストン
神学校の願書を捨てて、メリノ
ール会大学に入学しました。

9年後、青年はメリノール会の
司祭に叙階され、日本に派遣され
ました。東京で日本語を勉強し、
その後京都教区に任命されて、桂
小教区、四日市小教区、伊勢小教
区で6年間奉仕しました。京都か
ら北海道東室蘭小教区に任命され
ました。12年後、彼は苦小牧市に
移り、表町小教区と新富町小教区
の主任に任命され、後に合併して
苦小牧教会に改名されました。苦

小牧聖母幼稚園の園長にも就任。
29年後、登別小教区とともに東室
蘭小教区の主任に再び就任し、登
別カトリック聖心幼稚園の園長に
も就任しています。

この仕事を受けて、ウォルシュ神
父とプライス神父はこの件をロー
マに持ち込みました。その提案は
ローマでも温かく受け入れられ、
1911年6月20日、聖ペトロと
聖パウロの祝日に、教皇ピオ十世
は、新しい神学校の開校を祝福し
ました。この日は、現在もアメリ
カ・カトリック外国宣教会の創立
記念日として祝われています。新
しい神学校は、ニューヨーク市か
ら北へ電車で約1時間のニューヨ
ーク州、小さな町オシニング、サン
セットヒルという小さな丘の上に
建てられました。プライス神父は
イエスの母であるマリア様に対し
て深い信心がありました。プライ
ス神父の意向で、丘の名前をマリ
アのノール (Mary's Knoll) に
変更し、その頃から私達宣教会の
名前はメリノール (Maryknoll)
と呼ばれるようになりました。

ある晩、高校生たちの集まりに、
メリノール会の司祭が若い男女と
話をするために招かれ、話の後、
メリノール会に関するパンフレッ
トが配られました。数日後、青年
はメリノール会に連絡を取り、ポ
ストン地域で働いていた神父と面
談しました。青年は、地元の神学
校での面接とは大きく異なり、と
ても温かい気持ちで受け入れてく
れている事に気づきました。ポス
トンの神学校での面接から帰った
後、彼は母親にこの2つの経験
について話しました。母親は彼に
、「あなたの心に従いなさい」と言
いました。そして青年はポストン
神学校の願書を捨てて、メリノ
ール会大学に入学しました。

20世紀初頭の1910年、カナ
ダのモントリオールで開かれた聖
体大会で、アメリカ東海岸に住む
二人の若い司祭が出会いました。
ジェームズ・ウォルシュ神父はマ
サチューセッツ州ボストン出身。
トーマス・プライス神父は、アメ
リカ南部のノースカロライナ州の
田舎の出身でした。彼らは会話の
中で、アメリカの教会に対して共
通のビジョンを持つていることに
気づきました。二人とも合衆国の
教会が成長するためには、宣教師
を海外に派遣する事が必要だと感
じていました。その為、その考え
を何人かの司教と相談し、周りの
司教方はすぐにその二人の考えに
同意しました。司教は、ウォルシュ
神父とプライス神父の考えを、全
米の司教の年次集会以て提案しまし
た。若い司祭を海外宣教師として
養成する為の神学校を設立する考
えは温かく受け入れられ、ウォル
シュ神父とプライス神父がこの仕
事を引き受けることとなりました。

1950年代、ボストン市出身
のある青年がメリノール会と関わ
るようになりました。この青年は

その青年はもうそれほど若くは
なく、時々忘れっぽいですが。しか
し、彼は自分の好きなことをして
おり、私たちの天の父が3つの小
教区や幼稚園での宣教を祝福して
くださることを願っています。

訃報

◆殉教者聖ゲオルギオの
フランシスコ修道会



Sr.M.アグネシア
佐藤 チヨ

11月27日午後5時13分、パーキンソ
ン病・老衰のため花川マリア院にて
神様のみもとに召されました。86歳。

【略歴】

1937年11月25日生まれ
1959年2月22日受洗
1962年10月7日入会
1971年8月12日終生誓願
2014年11月22日誓願金祝



Sr.M.クニグンデ
井上 良子

11月29日午前10時2分、老衰のため
入院先の札幌道都病院にて神様のみ
もとに召されました。95歳。

【略歴】

1928年1月23日生まれ
1951年12月24日受洗
1955年11月25日入会
1963年8月12日終生誓願
2017年11月23日ダイヤモンド祝

人々と共に主への道を生ききる

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会 花川マリア院



花川マリア院は1986年12月7日、石狩市花川の地に開設致しました。姉妹の高齢化に伴い、高齢姉妹のためと黙想の家の必要のためでした。1984年6月には藤女子大学花川キャンパス、セミナーハウスを開設していました。当院は道路を隔て奥に入った同じ敷地内の森林に囲まれた静かな環境の中にあります。設立当初、派遣された姉妹は皆、聖霊に動かされ導かれ、神様の慈しみ深い御計画を強く感じ、日々の祈り、奉獻生活をみことばに生き、神様の道具となり、人々の救霊のために準備して下さったと感謝し、喜び、スタートしたと記されています。

御ミサをお捧げ下さった中川宏神父様は、初めて聖堂にお入りになった時、ステンドグラスの聖堂の美しさに、「あなたがたは聖霊の神殿である。これが現代の教会である。聖霊が地域の人々に神の祝福をもたらして下さっている。」と話されました。主の神殿、主のお招きに応え、人々と共に生きる使命を一層強くしたのです。毎朝の御ミサには、中川宏神父様、久保寺緑郎神父様、近野巨神父様、西牟田ジエーム神父様、太田哲也神父様をご都合をつけておいでくださり、大変有難いことでした。1987年6月にお告げの鐘が取り付けられ、祝福式が行われました。ドイツ総本部より来日中だった総長、副総長と共に、近くにある了恵寺の住職様が御出席くださり嬉しく感謝でした。鐘が大空に清く美しく響き渡り、聖母マリア様の祈りが地域の人々の心に優しく響いていることと思います。

開設の翌年から黙想の家の利用申し込みが次々とありました。司祭の黙想会、フランシスコ会、女子修道会、在世会、信徒の黙想会や会議、研修会等々行われ、また、御ミサに御聖体訪問に信徒の方々、学生さんがいらつしやいました。2010年3月に黙想会、黙想者のために聖ミカエル小聖堂を増築し喜ばれ利用されています。同じ時期に介護棟も増築いたしました。現在は、介護を必要とする姉妹、各分野での奉仕を終え院内で生活

している姉妹、大学勤務の姉妹、黙想会等御来院の皆様への対応の使命を受けとめ日々奉獻しています。2014年に納骨堂が完成しました。命日、お盆の時期、11月死者の月には、故人の身内の方、友人、知人、卒業生がお祈りにいらしてくださいませ。生前を懐かしく思い出され、また、神様の慈しみを、主の復活の神秘を分かち合う時をいただき、有難いことです。コロナ禍のため黙想の家は休止していましたが、昨年より再開し利用していただいています。

今年創立36年を迎えました。ご支援を頂き、今は天に召されたすべての方々に感謝いたします。そして、現在ご支援いただいております神父様、教会の皆様、全ての皆様に感謝いたします。私たちは日々御ミサ、祈りの恵みに与り、賛美、感謝をお捧げし、苦境にある人々、世界平和のため、様々な意向でお祈り致しております。主の愛の生命を頂き、共同体として、個人として、主の愛を証しする使徒職を担っています。

今年創立36年を迎えました。ご支援を頂き、今は天に召されたすべての方々に感謝いたします。そして、現在ご支援いただいております神父様、教会の皆様、全ての皆様に感謝いたします。私たちは日々御ミサ、祈りの恵みに与り、賛美、感謝をお捧げし、苦境にある人々、世界平和のため、様々な意向でお祈り致しております。主の愛の生命を頂き、共同体として、個人として、主の愛を証しする使徒職を担っています。



今年創立36年を迎えました。ご支援を頂き、今は天に召されたすべての方々に感謝いたします。そして、現在ご支援いただいております神父様、教会の皆様、全ての皆様に感謝いたします。私たちは日々御ミサ、祈りの恵みに与り、賛美、感謝をお捧げし、苦境にある人々、世界平和のため、様々な意向でお祈り致しております。主の愛の生命を頂き、共同体として、個人として、主の愛を証しする使徒職を担っています。

今年創立36年を迎えました。ご支援を頂き、今は天に召されたすべての方々に感謝いたします。そして、現在ご支援いただいております神父様、教会の皆様、全ての皆様に感謝いたします。私たちは日々御ミサ、祈りの恵みに与り、賛美、感謝をお捧げし、苦境にある人々、世界平和のため、様々な意向でお祈り致しております。主の愛の生命を頂き、共同体として、個人として、主の愛を証しする使徒職を担っています。

今年創立36年を迎えました。ご支援を頂き、今は天に召されたすべての方々に感謝いたします。そして、現在ご支援いただいております神父様、教会の皆様、全ての皆様に感謝いたします。私たちは日々御ミサ、祈りの恵みに与り、賛美、感謝をお捧げし、苦境にある人々、世界平和のため、様々な意向でお祈り致しております。主の愛の生命を頂き、共同体として、個人として、主の愛を証しする使徒職を担っています。

あとかたり 編集後語

10月2日から3日間の日程で、全国終身助祭の集いが、福岡市の大名町教会で開催され参加させていただきました。

終身助祭は、27名が全国16教区中9教区に在籍しており、内訳は南から沖縄3、鹿児島8、大分1、高松2、名古屋3、東京2、埼玉5、札幌1そして修道会となつていきます。召命の動機としては、鹿児島島の離島のように小教区の司牧の必要性というのと、埼玉の教区本部所属のように、例えば差別問題に長く携わるなど実社会でのキャリアからというのが特徴的でした。また、誕生から24年たった終身助祭制度であっても、未だ認知の低い現状と、地域で生まれ生活する者・実社会の中でキャリアを積み上げて来た者としての即応力の強さということを、分かち合いを通して確認することができました。勝谷司教の司教叙階から10年がたった札幌教区において、これからの10年間で終身助祭として如何に仕えるか、思いを巡らす集いとなりました。(桶田達也助祭)